



最果ての



泥りん

今日は、商品の値引きシールを誤って一日早く貼ってしまった。しかもこのことで注意されたのは三回目である。陳列棚を整理しながら、純也は暗澹たる気持ちになっていた。アルバイトのことだけではない。一事が万事そうなのである。

「なぜ自分はこんなにもできないのか。できると思っていたことができなくて、こなせると思っていたことがこなせない。」

夕日に沈む街のなかで純也は深くうなだれた。学校の先生からは、ことあるごとに

「もっとしっかりしろ」

といわれ続けていたがどうしっかりするのか、二十歳になってからもわからなかった。元来、移り気で誘惑に弱い純也はいままでひとつの事を成し遂げた事さえないのだ。せめて、このバイトは最低でも半年は続けようと堅く心に誓ったのだが、自分自身の性格的な粗さに早くも嫌気が差してしまっていた。それに、

「誰でも替えのきく仕事なんか続けてなんになる？」

というのが純也の本音だった。学校の授業も欠席しがちだ。つい、バイトを始めたせいにしたくなる。だが、始めたときは両立できると思っていた。純也の友人でリア充のAはバイトとサークルを両立させて、どうやら彼女もいるらしかった。そんな他人の生活に思いを馳せていたら、昼だった。純也は、布団に包まりながら、

「今日のゼミは休もう」

と思った。純也の通う大学はいわゆるFラン大学で、受験もビックリするくらい簡単なものだった。

「森下君って、何が楽しくて生きてるの」

これは、純也と同じゼミの杉山可南子に言われた言葉だ。

「いやっ、それが、その～」

とその場を取り繕うことしかできなかった。まさか、

「毎日エロ動画を見るのが楽しいです」

とは口が裂けてもいえない。この大学にすべり止めとして入ってきた、リア充の可南子にとっては、純也のような存在が不思議に見えるらしい。ここには多種多様な人間がやってくる。可南子のようにもともと上昇志向が強くて大学生活をエンジョイしようとする人は少数派で、だいたいは、落ちこぼれ、オタク、不良、引きこもり、によって成り立っていた。そして、ゼミではいわゆるやんちゃな学生が多く、純也は周囲から浮いていた。なので自然とXサークルが唯一の心落ち着ける場所となっていた。だが、そこあるのは馴れ合いと慰めあい、有名人たちを自分の物差しではかりにかけることだった。

「天才になりてー」

「いやwwお前天才じゃん」

「わからないんだろねw世間はwこの感覚が」

「才能あったら女の子抱けるのかな」

「いや、お前天才になるんだったら、俺イケメンになるわ」

「ホント、俺ってなんのために生きてるんだろ」

純也にも将来を期待された過去があった。いや、純也自身が期待していたとっていい。小さい頃、百科事典をみて、

「将来はバイオテクノロジーの研究者になる」

と夢をふくらませ、クローン羊のドリーが95年に誕生したときには、

「人間のクローンを造るのはオレだ」

と思っていた。親は高価な教材を小さかった純也に買い与えたが、現実は中学のときに落ちこぼれた

。

一方、純也の部屋のテレビでは京大のY教授がインタビューを受けていた。なんでも、生物化学分野のことで、ノーベル賞を受賞するかもしれないとのことだった。。純也は特にそれを気にすることもなく、PS3のスイッチを入れる。最近、中学生の間でブームになった大ヒットソフトだ。しかしそれもすぐに飽き、

「もうこんなゲームにはまるのは中学までだな」

そんなことを思いながら、机の上のパソコンに向かう。明日までにレポートを書かなければいけないからだ。が、結局ヘッドホンを着け、一人だけの快楽に耽ってゆく。たまに杉山可南子の顔がちらつく。昼間のイメージは夜が深まるにつれて増幅され、なめまかしい妄想となって純也にまといつく。周囲が静かだと息づかいまで聞こえてくるようだ。

「くそっ、俺なんて眼中にないくせに。ああっ、可南子っ」

夜は再び静けさを取り戻したように見えた。

「パソコンは悪魔の道具だ」

と、純也はつねづね思う。ツイッターもやってはみたが、今となっては恥ずかしい。周りに流され続ける自分がほとんど嫌だった。

盆も暮れのことである。実家に帰った純也はフト、幼き日々を思い出していた。生まれ育った場所から電車で三十分もすると、日本の原風景が広がっている。清流に沿って古いワンマン電車が走っていく。その中には幼い自分と家族が乗っている。そんなことを考えるうちに、

「もう一度あの場所に戻りたい」

という想いがこみあげてきた。純也は衝動に突き動かされるようにして、あの赤いワンマンに乗り込むことにした。車内には高校生と老人がまばらに座っている。田舎へ行けばどこでも見られるありふれた光景だが、都会で一人暮らしをしている純也にとっては新鮮であり、どこか懐かしく映った。しばらく電車にゆれていると、窓からは幼い子供が川辺で遊んでいるのが見え、純也の川に入りたい気持ちますます膨らんでいった。木造の駅に降りるとバスに乗り、川沿いを進み、やがて橋の欄干までくると純也はそこで降りた。橋のたもとまで降りていき、川を眺めた。あいかわらず水はとうとうと流れ、透き通っていた。純也はしばらくの間、その場に立ち尽くしてしまっていた。変わらなかったのである。小さかった頃と。

「いくら彼女ができなくても、後ろめたいことをしようとも、みじめな思いをしようとも、この川は自分を受け入れてくれる」

純也はこの川の流れに偉大な自然の母性を感じとっていた。

「ああ・・・・・・・・」

言葉が続かなかった。現実の親子は肉親といえども人間である。子供のすべてを親は受け入れてくれない。

「なさない、なさない」

これは純也が中学のときに親にいわれた言葉である。学校のテストの出来がよくなかったからだが、「そんなに自分はなさない奴だったのか」

と暗澹たる気持ちになったものだった。今、純也は水と一体になっていた。なにもかも忘れて、ただ川の流れになった。